

57 内藤記念くすり博物館「鱒石」の袋の書付について

後藤志朗¹⁾・中村輝子²⁾・遠藤次郎²⁾
ウォルフガング ミヒエル³⁾

「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」(略称「江戸モノづくり」)の一環で、各地に残る江戸時代から明治時代初期の医学・薬学資料を検討している。今回は、内藤記念くすり博物館が所蔵する江戸時代の生薬、「鱒石」(ジンセキ)について報告したい。

本生薬は白色で、石のように硬質な性状を示し、卵形〜長楕円形、長さ二〜三四ミリ、幅八〜一八ミリ、その辺縁の一部に鋸歯状突起、中央部に裂溝がある。これらの形状から、我々は、この生薬が魚の耳石であることを推定し、各種の耳石と比較検討し、ニベ科ニベ属オオニベとニベ科ホンニベ属ホンニベの耳石であることを明らかにした(日本薬学会、二〇〇四年三月)。

同館には、この生薬の九つの包みが収蔵されている。本会では、それらの書付に注目して報告したい。最も古い包みには「鱒之石」として、寛政六年五月二十九日に松平上総之助(池田斉政)が若年寄の遠江守(加納久周)を介して、將軍・家斉に献上したことを示す文章などが記されている。因みに、池田斉政は寛政六年三月八日に備前岡山藩三十一万五千二百石を襲封している。

また別の包みには、「寛政九年四月十日 中野監物」の名で「御腰物御用ニ相渡候 鱒石摺粉：」、「鱒鯪石物の摺粉」とある。越谷吾山の『物類称呼』(江戸中期の方言辞書・安永四年刊)に「鱒鯪 にべ〇此魚の小なる物を土佐にて・しらぶると云 大なる物を四國にて・ぬべといふ 又・そぢ共いふ 備前にて・そこにべと云 にべ」とは魚の腹中に鰾膠(にべ)あるゆへに名とす」と見える。中野は『物類称呼』を見ていたと考えられる。彼はこの時期「小納戸」の役職に就いており、この職には膳番などの受持ちがあるので、物産の方言には熟知する必要があったと考えられるからである。その上で、中野は、岡山藩の池田家が八月に鰾(うきぶくろ)を幕府

に献上する事を知っていたから、この石を「にべの石」と同定したのであろう。鰐は厚い膠質で大きく、樹枝状の突起物があり、上等のニカワとなり、弓を張り合わせるのに用いる。このことは『本草綱目啓蒙』石首魚の項に「石首魚 ニベ ソコニベ雲州備前：大小皆首ニ二石アリ潔白堅硬ニシテ瑪瑙ノ如クニシテ透明ナラズ：(略)：ニベノ腹中ニ白鰐アリ長サ七八寸白色ニシテ厚サ二分許備前ノ兒島ニテ フクト云クチニモコレアレドモ小ナリ白鰐ヲ製シテ膠トナスヲニベト云物ヲ粘スルニ甚固シ弓工コレヲ用ユ即鱧鯪ナリ」と記載されていることでも確認できるし、又「大小皆首に二石あり、潔白堅硬にして瑪瑙の如くにして透明ならず」から、この石が耳石であることが知れる。内藤記念くすり博物館が所蔵する石は、この内容に合致する。

しかし、耳石の入った袋に記載されている寛政六年十一月の記述や中野監物が記した寛政九年四月十日の記述を検討するに、中国や日本の本草書に記載されている「石淋・諸淋・小便不利・中耳炎・鼻炎・脳漏」の効用とは異なっている。袋の記述からすると、精力剤として、家

斉が耳石を用いたと考えられる。

これに関連して考えられるのは『旗本の経済学―御庭番川村修富の手留帳―』の文政五年十一月十六日に見える記述である。「御取り散らしの膾肭臍(オットセイ)を少々頂戴」。当時五十一歳の家斉が愛用していた精力剤を座敷へ取り散らしてしまったので、それを拾い集めて、修富たちが少量ずつ頂戴したのである。

寛政九年(一七九七)四月十日の記述、文政五年(一八二二)十一月十六日の記述と時期に違いがあるが、將軍・家斉は精力剤に関心があったと推測できる。

しかし、現時点では、ニベ類の耳石を精力剤に用いた資料を他に見出してはいない。今後の課題であらう。

¹⁾(神奈川県平塚市)

²⁾(東京理科大学薬学部)

³⁾九州大学言語文化研究院